

1. はじめに

惣作遺跡は安城市木戸町の鹿乗川左岸に所在する遺跡で、弥生時代から江戸時代までの様々な遺構や遺物が確認されている。本遺跡から出土した、刀の柄の樹種同定を行った。なお、同試料を用いた放射性炭素年代測定の結果、6世紀後半～7世紀前半の値が得られている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、刀の柄（試料 No. 65）1点である。剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラルで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3. 結果と考察

常緑広葉樹のツバキ属であった。木取りは芯持丸木である。刀や鉾、槍など武具の柄にはクリやカシ類、ケヤキなど重硬な材が用いられることが多い（島地・伊東，1988）。本試料に利用されていたツバキ属も重硬および強靱な材であり、適材であったと推測される。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

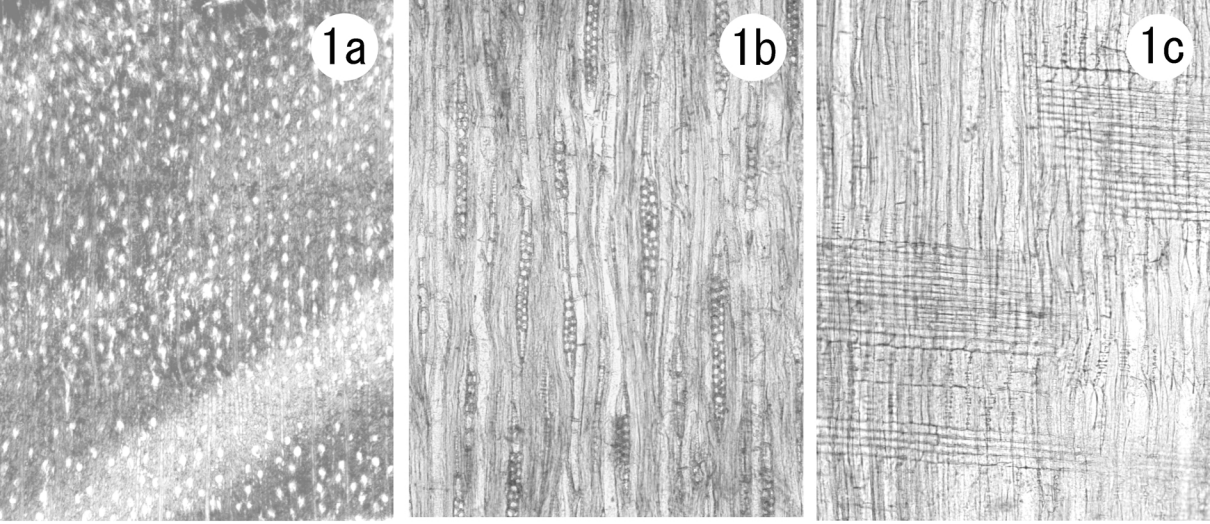
(1) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版1 1a-1c (No. 65)

小径でほぼ単独の道管が、晩材に向けてやや径を減じながら均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は10段程度の階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に2～4細胞連なる異性で1～3列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。

ツバキ属は、温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキ、サザンカ、チャノキなどがある。材は、重硬・緻密で切削加工および割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きい。

引用文献

島地謙、伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．259p，雄山閣出版．



スケール： 

図版1 惣作遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

1a-1c. ツバキ属 (No.65)

a:横断面 (スケール=500 μ m)、b:接線断面 (スケール=200 μ m)、c:放射断面 (スケール=200 μ m)